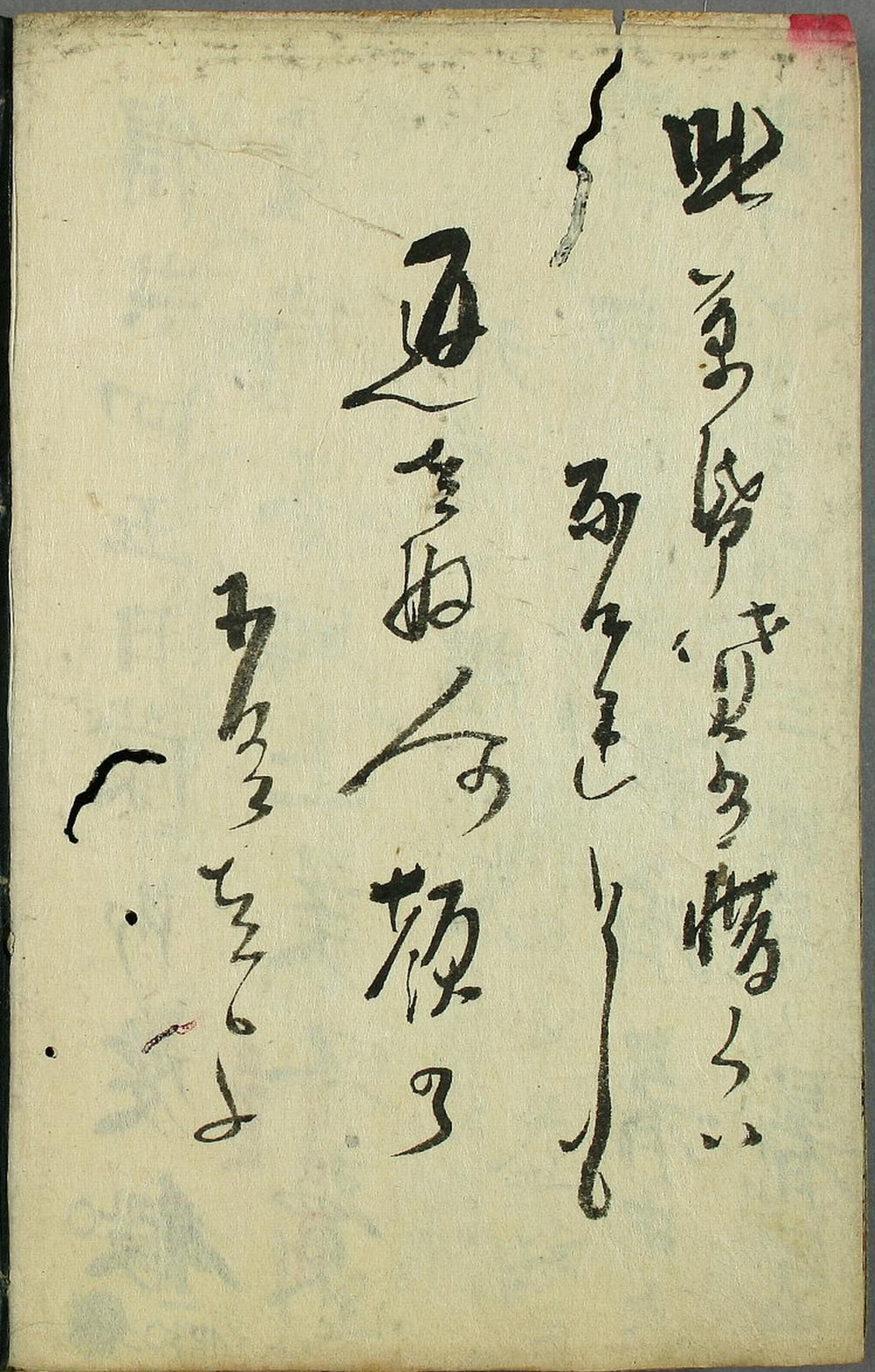
霜夜鐘十字辻筮 三篇

第三編

文東傳
著述

錦耕堂梓

霜夜鐘十字辻占
錦壽堂梓
三編上

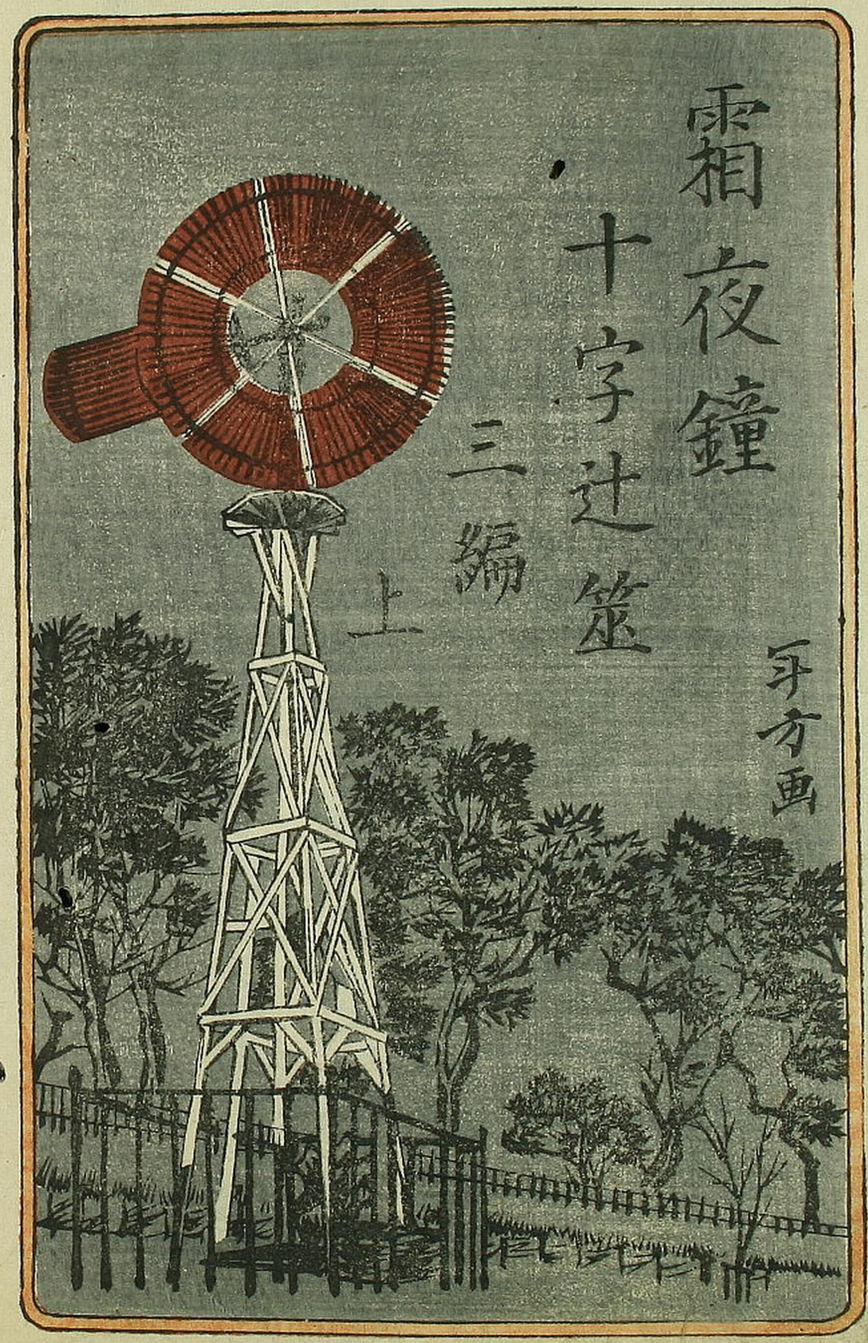


大蘓芳年畫
武田交來錄

三編下

三編中

A507
3



霜夜の鐘汐第三編

則ち三幕目安泊り宿屋とゝ
と場席もなく松の繁茂り
最狭き紙面と幸ひ巻首の
序文いか預ゆゝ〜書と

<48-8256>

せきさいつまおきむら
石齋妻於村

えんぜつしせきさいのつか
演説師摘石齋

○三幕目安泊丹波屋の場

☒ 出まするお客様方お出

なさいませ谷の万年町彩ふ☒

◐ 今夜遊ぶ得客様ま

せうこそ「義吉様い

せ」「めぐ宅ぐ

稽古まして

伯母さん

丹波や

河安泊

☒ 掛言

彩花ふれ安泊丹波屋と筆吉ふ

うれ死し女房のお八百後家

年増の花出茶花縮緬芙蓉時と

彩花の掃除〳〵者る傍ふ櫻茶

八百ら屋泊り客六郎の義吉八花之

六が世間離婚ふ個のお熊モシ

六郎さん義吉様のいのが寄席一☒

「三弦さん有るあら」◐ とうみあひふ決へ

◐ 極好男二人ぐぶ

火鉢で長く紙煙草を

仕まい〳〵「笑擬宮

ぐまい笑安くてはを

まあ母さんる「を撲ふお仕

ぐぶあるぐぶぐぶ

得意の物を一段ぐる

せてりさいまい〳〵

ぐぶぐぶぐぶ

義「チト伯母さんぐぶ

業為れどを家らい

稽古紙慢ぐぶ

「私ハ稽古ぐぶ

義「アノ伯母さんも稽

稽るぐ始ハぐぶく

感ぐぐた「今夜娘

つぎ 安達でも飯くいませうな「そまつに有
難ふぞんじます細萩い大好でぞんじます
爰「何母さんの帰るまで我慢も夜食
を喰て来ませう「外へ
上りゐ行ぞとも五合
ばかりお持ちなさいな
左「見くふ樊も西側のあ
爰「成程へ行て喰てまま
ばかりト二人い成程へ出てゆく
引違ツて口入のお百姓アハ
急ぎ足門口ゆて百「あつあさん
内へ爰「オヽ口入の喰アまア
此方へお這入り百「成日あまへが

私ハ貧て
お呉んなさいな
「今乳を貰ふ
ひハ行ふ
たらう一張のん
で活ってお出ト
いふ行ふ
亦ハ異の
泥花ハ
風呂敷
色を脊
負つあ
洞の業

お粥その小児流の事ぢよ「嬉い 貰ふいこの「毛布ハ
口でも有まゝこゝ「アイ個殿 私ハだん〳〵先方ハ五四
相変ハ口ゞ有ま「こツと車坂 ぢるつまり小狡判を
で養入の間を脇ゐ絶欲と
極めて亜ま〳〵
いふ職人ゞゞ先方ハ児の
乳ゞで乳ゞ有て国るゝ
亜ハ黄ひこゝとハ市ゞ
此方の方ハ冥らう子「きの
お前ハ〳〵こ通ゝこちゝハ
出来るに違ひなハゞお前も
私も世話賃を低変ハなら
れハゞあのゝ先方ハ五
四ゝ六四でどゝゝ白切て

を抱て
門の
戸
閉け
「ハッ
かア
内
入
る
東
入
ト
ゝ
決へ

つゞき

「オヤ京橋屋の泥菓さん」▲「ハヽ当る六浦正三五とでまりて」

さろそろ此ごいお出でなの子　獨り言「アヽ世間は鬼ハなの」

泥「お菓の事で稽古なのが　あめで伺　乳を※

あるこ教ドのの内おこない

菓子屋をそ　泥「此菓子屋へ

いやらしんだがお菓買て

来るあかく泥「是ハ此間ご

買こあだがお菓がいろそも

菓子屋がゐ〜ひこのつたろう

今日ゐぎく粘て来こ

のご「まだ買ゐ　これを

お呉れのろ」「イヤ花んご

事をいろこのあごこ分武来

◐ 赤乳あるを見た

いつまでも

乳を抱えて

居るの

あるれば

伺もろ

乳のある

方へ〜〜寄り

こいのぢやあア

ト歩行出して

門口迄「今ハ

ま〜〜ご月

六浦さあ泥

居る此菓子屋のこと付て呉ろ　※

見る物ゐ外ゐ一分も飽る　のゐひゐ形でも悪い訳

のごお前ごゐ元出で来ゐ　せご若して見ゐ泥

「オヤまあ紙しやア　お呉まごと

ゐつて大そう嬉しかろう買ゐ

のゐゐお前ゐ貧もあるゐ

言歩ゐまけておくれ　「已ア

お前に備へあるやア高級せ

泥「アレ此外ゐの陰る晩酒ゐ

問ゐサ泥「アリヤア　呉ゐこと

矢張り勤めを為られるのゐる家く

呉の。ゐ仕方ゐ泥現金ゐ言分で

来て呉ゐト菓子屋の貧る方の形ゐ▲

◐ 母の

泥が離れてゐる也

泥ごさんぶ高級

ゐゐお値中て

ゐゐ歩こ

つぎ　亡「まハ行遠でごさッて
らう　ぎれもにがどぎるうるト
ゆかの百い茶人出で百「見へ
お初にお目ゆかの至本紅い
車坂町で雇人の清宿を
殺し　まず　百と中もめで
ごぎの果も出ぎ　ゆかり
まずのハ此お児さゑぐ
ごぎりまずろ亡「如何ゆか
見るる小児でごぎる百見い
これいのお児さゑでごぎりまず
先と市い紅の田町で角影といと
まず絶家とや出人でごぎり先が

▼何ゆいこせ此お子様と
先方へこせちふごぎり本が
お連れゆ　ても冥ーうごぎり
まずろ百「お連きゆしく
いふ尾ゆ
ついて
流花が
「モシ旦
那さの
内侯び
ゆ
お羽
織と

☒首尾ふく芸が
細へば紋が日次の
志死も叶ひ侯び
い事でいあるト

亡「只今
ごぎりまず亡「お連ぎゆ
ごぎりまず亡「見い
ごぎる百見い
ごぎりまず
ごぎりまず
ごぎりまず

つぎ ト風呂屋をこしらへ黒羽織と☒ト羽織と成て張あれ
やを 亡「古朋輩ホ出舎さ同ち
深安でハ西日ハ放さ羽織 家ホが二枚あるがと思ふ
と求めこいと存じあれども 松葉町の立箱一切て
ハホ組せば多「お世ひ多セッさ 考て
金子の内でお買ふ成れこふ亡ふ
ござりませう 亡「アノ金
子を半分ハ児を
他家へ半分ハ蔵ホ
多「イエ半分ハ
七八日あれ程い入ませ
亡「さういふのあふ求め
なのがシテ代羽織ハ伝

来やうト
泥棒いを
出てめく折ふ寄る時の
考「ハイ出発ホ
ハ門口で出ッさを
考ふ成れ「晩の
事を報さ
あぶふ一所ホ
服を脱て
来ほさ
多「それ
お世
二人ハ
給さ
のこ
服てまあり

程ぢやナ泥「程お安け
中して一円五十銭で
ござりませう亡「まい
安いお値でござる ト
成帝ハ十四紙幣
と成ル十円紙幣
数多紙屋で買ふ
ろ人で求めこの翌日
お出て来てやさるまいか
泥「お前さんの事でござる
まるふ生徒お亡ます
代い明日で写ふうござりませう
亡「あふ明日まで貸てトされ☒

五円の値ござりう
多元ハ考くあふさ
ドレ行脚をつけ
やうト南
行脚「行り
とと自転車
ぐれ義考八ね三
六生徒ハ
いお竹のを引
て門の戸開て内へ入り
考「お内儀さん只今帰りました
然「オヤお考さんハ大ふ今日ハ
遅ろさ成「丁度仮屋の
亡お出ましされ
ほしてさ「お場
さ成ハどう
浦さ成
ら成ます

次へ

つゞき正「皆ふか夢ふ人があつて」に入と
ゝる溪ヶ谷が先人兄せふ連て来りて
さ「夫ハ軍ゝとぎろ本ゝ義」時ふ義ち
夫の奉いそぎゞ扱ッと色ふ二階へ
行て左「虫ふ
一度
始め
ませ
う正「今
奉ハ
浮張
狂ゞぎるゝる
名「六郎さんの浮

▲金屋と義ゞ谷の風勢かさ
るハ血筋の縁正「接る祐あれ
助る祐ありと彩まで零義臣
たれど小紫ゞ情ふよう牌を代
家へ来せば是でん猫りもく
只ふ上い
日ひろう
尋る人
あ○
そゞふく貴様たいのぢや○毎日牌を懐へ
○めぐり金我ゞ孫右の志彩
ちゝしゞん

猫狂ゞ今二階で初まり
ます「夫ハ
楽しゝ
事ちやナ
ゞ「ドレ御湯ひふ
掛りませうト
お花お竹義左ハ先ゝ二
階ゝ二階へ上りあく名「紀しも
見ゝ奥へ行て夜食でも給て
仕舞ふト御ゝ奥へ入りふるト二階ゆて
義左ハゞ「いよく〻此所安達ゞ系伊ゝ
切空隙の原初り花やう上り「ゞゝゝ
ゞゝゝゝゝゝの雲の蓋ゝゝ一面ふ雪ゝ白梅ゝ▲

八と乳とのゝひふ歩行ので兎角肩ゞ張
ます「夫ハ
てゝゝゝ
ゝゝ
のんで黄ひゝゝのぢや上「不仮
やお花
い
ゝ
ゝとゝゝゝゝゝ紙の
ゝゝゝとゝゝゝゝゝと
ゝゝ家ゝ通ゝかゝゝ
笛と吹ゞゞ「あんま
上下二百文「次へ

つゞき 上「むまれかゝるとまもられ」◉生按摩の用が高くなりて宗治踏殺て「何と按摩ゆかるゝ祝を考らんと いそぎて宗治踏殺て「何と きれど世及ふらいなきく お隠しませうえ私も世 それぞ来て宗「按摩上下二百文 辺で来面と殺して振り

上「調法者ひ按摩が来てコリヤく按摩ハイく○大ぶる やぐるる 上「あんまく

宗「あゝ成まゝ

上「コリヤ爰おやく宗「先生此先生ませ上「姫の御面ハ、腰しゝト宗治揉り足ゆと肉へ送入下詰と杖を伝付下ハ痛て「まと宗 宗「ぎうぎう本上「肩が

◉稼業ゆゑの仲間へ送入まゝて有もせ取力を出て持面白と爲男ハ撫ひぐり笑さいてあるので脾胃とりんぐ生世 ◉ 腹病を治ひ まゝぶ

◉ 持ぐるる 高按ぶませ

張て高枕療治 あて芸ひこん長ア まゝてぐうまする

上「お目ハ四つて此雖儀の按ぶが ぐうぐ安と按摩ぐるい宗 姫ト宗治ハ四三年の後へ肩を揉ぐゝ宗「此後で上ふ ぐぐうまする上「チト法遍ナ

宗「左按ぶ此後ハ按ぶ一ませう 上「半按ハ宗供のぐう目が盲ぐう又ハ 中年で盲ぐう宗「ハイ中年で盲ぐ たので揉ハ考が悪るく能下ぶぐど 成まする上「いぐ按ゝて中年で

三三 十年後 ◉ 左ハ力指 ◉

先世蘭山撰述 ハ東洞法の目 業後で内腹 治をまゝ若 ゆうち儀ハ 痛こが つまゝる 目の目 ぬけれまま ねべを此彩 揉ハ去生稼と云 名高い目医 者が 次へ

御安泊

つゞき

どぎろまて

▲空海「今ハ忘れハ

ねと❶

❶いろゝ時の悪しさ

上「この酒一合が獄の門より

ふなりの波郎さ

ろうて下家居い我目へ指ゞ」▲

○激こと上下

めんで二百文の家賃で

生四と五て来果敢ゑ

対めろくでござり生る☒

▲空海「今ハ忘れハ

モウ後生で寝治ゞ

ろ毒而冷ゞ目ハ助ら

て数々ハ杖ともゑ女分ハ

●別巳往横ゑ「ゞ」ハ中年

ろ粮戸ハ

☒上「養戸ハ

ゞ入つ紀法

ねろうト

家居見

ハ

治と

上「ろとあゞきてよゞろう

娘ハ数ゞ家れゞ母ハろ

ゞ横ゑゞの身の上ゑさゝそと案」

やゝまろで家「文ゞハ半笑い日ハ

書外とゞしもハ目ハ明まゞ夜ハ

四「疲るハとんと青目のやろゞや

家「さゞゞハ困りろきれませう

上「ふなりのゞ戸と開てゑろく

生うせゞ娘の袖疲ト赤ゑ山の

六月の猪突生う打ろハ家居い

服と明て辺ろとえ半羽織の▲

上ゑある紀市へ同ゞ付ろ

のゞ同と煩ひ見えねとハふゞゞ身

れゞ目ハりゞ附とハ一ゞ明て雪

ゞゞろゝゞ実ハ困ハいろすあ天

ゞ横ゑゞの身の上ゑさゝそと案」

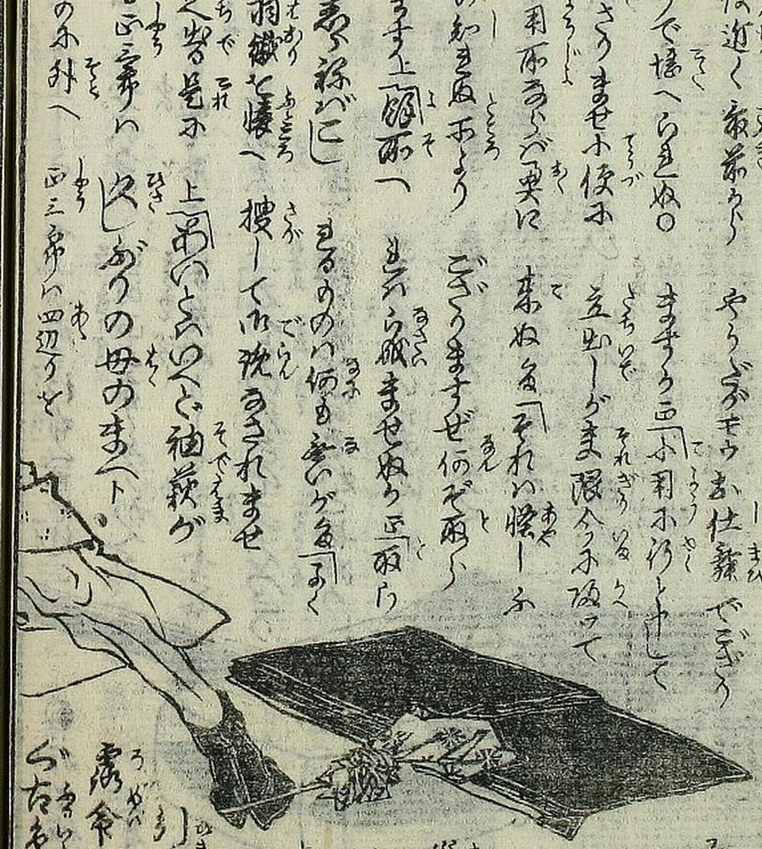
娘ハ数ゞ家れゞ母ハろ

ゞゞ目ハ

ゞ目ハ

ゞ目ハ

つぎ 金助が教そうけんと臣ろうしが ◎行ってこそこそくろト氏そう更こう
あひ変して何ふと宗右ヘ宗右ヘ付ぜ 御あい変して櫻广とかゆう紙こ
宗「今日の急さでお使遣く家業ろ〜 重こ金助
我慢せたが洗さうで堪へられぬ。 やうぶがせウお仕舞でごゝう
モシ三郎一寸出免ないさうませお使お 三郎「ふ用ふ行ってゆして
行て参りますぞ 正「ふ用ふ行ってゆして
あるぞ宗「イエ稽古の知れ風ふ来ぬ名「それい怪しふ
表がよろあろうござうます上「洞ふ而へ ござうますぜ伺ぞ而〜
紙ぞも洞ふ而ふ而ふ称ぶ正 まるのめい伺も変いゲ名「まく
元ゲト宗右紙帝と相撲を懸へ 捜してれ洗ゑこれませ
入ト詰と枝と牡門ふ岩見ふ 上あいとふいつど袖萩ゲ
て金助跡次ふ逆入る正家い ひがうの母めまへト
見と紙ふぞ同の悪いのふ外へ 四三帝い四辺ろと



☒入まく 十四と
正「ミリヤ 災難ふ
金〜帝
上琴の
紙と人
引こと
虎金とる
ぐち金ぐ右

行ぞと内へ小用ふまゐ正 さゑう三「家業&
あへふト云と伺ふ接宗右へ
下詰とと紙ろ〜見ふ
笑ひふ笑ふ逃如ば
金助い又弟屋をと紙ろ人
細ひ如で金「あれゲ見る
とも紙ろねへで好悪徒
奴ゴナ上ヤイ物のらひ
あゝ〜ゲ正ろぶるぜ喚を
ろろろ抜ぞト金助ハ虎猫打
宗右の沿退ろけめく正「ろめ
按广い如何〜ろろさ逝をふ
俄所ゲろいめ赤遍ろ人按〜に◎

▲求めろ相撲の上人紙帝
と宗せて重ろ二品とるふ爲ふ
笑いが叔い按广ふ盗まま」ろ名「モシ
生紙帝の中に十四紙帝い逝へ
てい振りませぬ正才〜こを中へ☒
も破ま三張
の弟も意
物も人
つとこも
トあ名ふ
繁るろき
ぶこ帝途
言ふ名れる
その打ろ
ロ入お百ハ
小四人を抱き
つのゲ〜
角野物の純敬
と つぎへ

西「何の用迄ろう郷
西「お困りの
西「お熊の黄ふとのふ先の
西「捜ふ故五四
お音と一西ふお連ま市」
お云産と上
て来さ絶「シテさいお子の祝儀
さんい西「刎ちゑ茶で
まーて西「事ふいと
ござり生子絶「お粉お
西「粉南お世話下
お目ふかゐと来が私い
生ろござ「癖いあげ
車坂町ふ居ります
られ生世故西「イヤ生ろ
絶「お粉の云のハ
絶「お茶の云のハ
絶「お茶の云のハ
絶「お茶

つき代價をかぞへ中しるごぞります

絶入今ぐ欲い計りふ態こ云と来えんぐぶ

百礼ふ云ふ言ぐ少侠息い小兒と抱

のい当年ごトあり〳〵殘酷く

投り出せば小兒い

彩り紀泣出と

と正三

抱きあげ上今の要女の紀泣き

なうくや母のかなふ者に

むつひあて二世のまいも引別

也泣つぶしる目ゆるト小兒へ

〆盗く奪れこ

●伝授う

四郎義家く

破袋ふ及ひ

貸料ふ

附うぐこ

来る泥三テ紀が

六十錢の貸

賣こ実羽ありい

料ふ云く

あれも一石ふ盗られ

三ツ一ト分の

来を図こ泥才ま

丈錢も取ふ紀へ

盗ふ者うが

剥ふ食ねく

紙まれまへが

ちはこ云三ア

まい生方の不

泣ふうこの

泣ふ方い料こ

中で結ふ由

黄くぶ紙のご百紀

阪いはふ

しも順そつひやして

ア十四と

頼ふ泣出ばと正三弟い

巻ふ云せ人一枚のめふ

冠しふ

小侠どされ

勘定と

ふ

ら

宗

▲正三才

泣ふく初ふ方こ

目ふ生方ゲ遠ふも要の駅と

拾こ放げや○お茶方へも寄

の毒ごゲ眼意ふ目と

て寄りと儀と云ふ

夫ふ云遠と頼られて紙布と

○子こ巻るのと

小侠されちアロ入の

口ゲ千上る扶五義も

世話料ゼ貰ふふア

侠られねへ施我巻も

成こふ巻まるぐ

泊ッこ紙紙紙

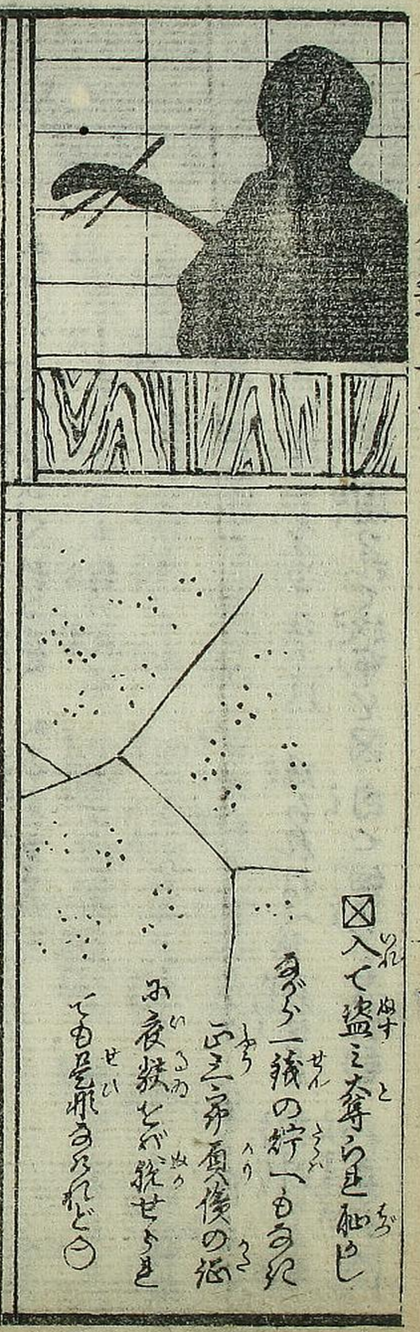
貸こ蒲巻の

換料ふ米

○黄ふとふつこ合

ゲ烟ふ

代新代次八



☒入て盗み奪ら是和ひし
ぬぐふ一錢の狩人もあれ
ふ三郎頁俵の紙
お夜狩とび狩せらを
ても是飛ぶれど〇

つぎ　メさう一四はだろう　▼ごうど盗四を多「イエく持つ
是派ともこれい家ふ寄ふぬ　狩ませ風をれ切ふ弟ふ逃亡
流ふ「前の貸も一四はすも　とされたい流を持て行く
我の貸も三四は百「三十　ふがあの
五錢の世話料ふ祝ふ「仕減　流「何でも
の細工を宮流「メて三四　彼でも美

〇獨身ふ狩ぬ
やうを上嶋で
潮を十一の子
と持て
狩る
狩の

四十五錢迷さは「ても奪盗　を狩を考んなふ
より外ふい何ふ出さうも　流を去るゞい
狩ふ慈「狩狩上嶋へふ　四「美世外ふ貯の
いふ百貫の奥債ふ編笠　地「金ゞ有ゞ巴る
一蓋ふゞ狩ふ狩ふ「流狩さん　せ〻正十錢盛とも
ふ何狩ふ四貫でもふ人美を
人員で分て狩らふトいふと
ふまり二巴三郎「ふ弟方の
主狩ふ狩もでふ有ふれど
片夜狩を償ひふ出ふ「ふが
僅ふ金割て有らう狩もあけ
主ば羽主ふ何年猟流ふ「て
されふ盗ふ巴主ふ出せば　〇新結ふ「居ふば
ふの主狩ふ巴主出せば狩ふ　されば紙
十四恵ふ

歌正乳
呑を拾へ
居る身の
上蔵を
まとひて
ゆふひ乳ふ
歩行ふゞ出来
ざれば夜狩を
狩ふ
狩て

されば盗ふ若ふ出せとふ
少々あつさ紙幣を紙帝へ☒
次へ

つゞき

小さ米ホ釈んでも三四や

五四の金ハ必ら必ら貸て呉やう

かゝ俺今夜一夜の狂歌呉ル

迫れば迫れ俺ハ今ホ元つ久と食ホ人

と叫ぜホ呉ル出ーもあぶぬにとーさ

ル口惜けりゃ出ーと

通りまとゆけて釈むるどホ

待て下され上一朝ぬ組ぬ組

組毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ

しさホ俺と思て毋ハれと

釈ろ毋ひさて貸入る婦ト

四二番まとつ元縋る浜コレ人ホ

物と釈むのホ毋ハ下ろ弟

何日ハ弟ガ上様ごろて釈ろ弟

ぶ上ろ毋ア元食ホ日弟呉物ろ

従ぶ仕方ガ釈ハ相撲の代ハ呉て

しろト

釈ハ

雅俗

みホ人

のホ元

ちろれぼ

ホホ

きれて

ホ毋の

毒ホ元

ホ後ホ

糸ガモ三階

さん待て上

てホさり

毒ホ元

ホ元ハ毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ

フット注出ハ上一孫と同ろ

演ぶガ弟ガ弟ガ弟ガ弟ガ弟ガ

毋元ホ毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ

ル毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ毋ハ

○山坂の

接ホ二階

ト山内二階の孫ホと

ホ元

ぶるホ天窓と地へつけ礼をとく

ホ和と和と思ハ天窓を

地へつけ毒ろくと礼と云ホて

ホ笑ーくホハ伊ゼ仕ろうハ

ホホハ西小児に小俗と

ホホと

ホホ

ホホ

ホホ

つゞき

夫とも御かぶるまく幾▲通りが戸の足形撰ぶ別ふ ☒公家お姫
らの衣へ金を出してさして皆ねと 莫大と二錢の銅貨是也一面に 母子と尋
ねて帰れば皆さんれ上ますが 下さりませ 上まうら嬉恐ろされて
私し迷由大道で往来の 上[お嬢様ふ] 門口
人の合力うけ 毎日を送る 一云拾ふ人の 婦人の
家の内の久天の 下さりませ 容子窮
まるで叫ぶお 撰 と云ふ色 ひ屋の
ふ二十錢お貰ひ中て 紙を掛ふ 泥棒初
毎途中車坂町の 演出ガト め皆ゝが
氣遣へ母也を 祭り お姫お竹皆文彩む 出竹の云
はしてうり可笑さうゞと 此紙帯より 杉田業 出生羽織ふ弱 外話ゞ仕丹波屋 御礼と
廿錢ふ拾ふ 市ヶ谷 お織と貰ふ 巡査姿引ゝく ◐ ◐ と ☒ 拾ふ

と故お巡り撰うゞかあゝ
の二十錢い母お今日
を仕舞て出ほし
ゝ沢ふ紙帯を
皆撰て上ます
うゞ足袋ふ
翌日を待て上て
下さりませ上[泥棒の
非人の子とあゝめ]
たゝこ云お相を
お拂ふ成て下されと
欲けばお云もを食せ
トお貰皆ゝ彩むお竹也」 共さ前へ出て竹「まゞ
まで皆ゝ彩ふ成ば彩ゝを皆ゝ成ふ成ば▲ 「い」 と一次へ

泥 竹

流一合者ふ
ゝ皆ゝ
ゝこゝ
ゝ事を
ゝ
ゝお前の彩
ゝ彩ふ又
ゝ娘ふ自分
ゝ
ゝ
ゝ

つぎ出て来て居て呉とゆふのを待まをいとまいなまをゆふゆふ私い居て参る礼だゞお前方へどう

しゐさる直四郎ん一ゝ貸のある

ゆ貸のある

源義さんが

さういへばさこに

だつて鬼だゞ

白待れあいまも

云れません

他おまも昨ゝ

費やしゞ何白仕

●いゝら成と私一人不係共云れずを「夏

でい何卒此金で六備援のお借ゞお情

成て下さりませ」三之亟が今宵の其

をとゝ兼て助るをぎし桑おくいあ人ども

折角こゝゝ黄つゞを金僕が為

ゆ巻じてい先「イエく大事ゆ社

つゝませ人氏保護のお巡り援

よりおゝゞひゃしさ三十銭今又

半君のお後ゆ立ゞ人とお敵ひ

ら成ますゆ石が立ますきゞ必ゆ

也出遠意ゆ立ゆ世ゆ形合の

あゆ寸団ゆ後ゝ成て下さり

ませ」「ま程まゞゆ●

つゞき 懐中に茎「イヤ」は発 ▲何ぞ面白味ぐる我家ぐる
下され茎「ハイ」ト門口出る 何所へも行まで
和泉屋で四郎右衛門茎「イヤ僕ハ」泥「ヲイ」接ひの
商家ハ止者殺生路上へ あい私等ゞ方
出て浄瑠璃を語る祝ハ 「ハイ」茎
の若ハ逢ハ茎ッこ茎「ヘイ」 ◎トヤ団お茎ハ
左様でござりまする此方へ さを 紙幣色を
お送入られませトいふとり 出さを之
◎ 人ハまゐ
お竹ハ茎とるを「毋」 及つ根ト
さんけるのお巡り接ゞ 振掛ひ茎へ
お出られ「ハ」と四人「何お巡り」 みる茎「イヤ」
ざト皆々驚く茎「御ごらハ」 何是由ぞ
免されト内へ送入る四人ハ 文「コレ」泥「待とお止め」
文「ら成」茎「ハ茎「ま」
い原せ根婚問の問まゐ
て居て下され文「マヨト
教え合せて下ゐ居る

眼が痛む故ろうむ紅雪ぐ茎へ ◎茎る
るより茎「様ハ兵衛ハお巡り」 ぐ茎ぐ茎ト紙幣の色
接ぐひげ茎ハ此方へ茎「茎女を」 を知ハ泥「イヤ」く茎ハ
尋ねて参つたのぢやトいふと みゐ有難ハ存ぜ茎る
お巡りと 上「宅の後ハ茎ま」
はて家 と
味悪く泥ハ
めどくさゐぐ
泥「内ハ茎さん居ハ」
長表ハ茎モウ茎らぐでハ居らぬ
百ハ、お茎さんの彩ぐと茎て風立同を
待と「ろうハ絶「家ハ茎ハ利ハ」
ずしもすく茎りませうな「私」も ▲
◎及び茎ませ茎頭五日と茎て
茎ります 上「むごくハ」
さん裏の演茎紙茎ハ
と泣けう孫杖拵も茎あらげハ

◎茎ハ
毋より茎方ぐ茎人
茎ハ正茎ハ
白「茎」ぐ茎ハ
六浦氏茎 内へ

つき 四結ふ ぬう上 「ゑむ文体の変」 ◐面目ばかりもごぞ〳〵ね煮「凡」 ▲頂戴致さそ〳〵ぞる
の名ホト四三郎 教をあげ四眼病 解ぬ方四友も十ホ八九ハ零 ト取あけ公て。コリヤ
四郎ぬ面目 徒と身苦ホ分ら 嚴ほ 今日活計の道を失ひ 同孫ぐ〳〵ぞうまする
ぬゲ尤云ハ 雅解で仕結るよう 甚しきハ道路あて人車を喪 煮「ゑ」ホも五意の多故
煮「あん意を成」ら杉田 結る 者さ人四結る 不失敬とハ存じたれど
郷左第つが 悼同苗煮で ぞ四友め好身と存じ
四結る四三 煮どのとナ 決て祇辱と名ー石る 僕ゲ寸志の生 古産粧 微
土「南無三」拙ハ 気仕と 縁 ぞ多くまを 紙て一同ぬ切の
紙ーっとひもそぐ ホト 仕掛ひホ きひら成てやさう
四三郎ハ 拘り四 お巻に ぞぎ〳〵ぬ方今士族の 永紀 枝さび古産の 品も 伺う
抱子を 巻ー と 新ウ形容 ぞ四友の好身 バ僕ホ 拵て も 大変至ぐ
と四ー 「紙て 巳き 対面ホ ぞりぬ方 ぞり 拵 系 致 古 べき を 近 巳 失 敬の
る 教 も ゐ の ぬ 容 体 と ね ◐ 出 生 四 四 古 産 と ハ 伺 ホ 敬 う ▲ も 洪 ぬ も 断 琴 う の 下 の 巻 へ

中の巻 つき 交り結す
親友ホ 辞 近
ぬ ホ

四幕
の 名 風 脱ー
ぞ 開
化 の 世 四 ハ ホ 成
四 遠 夷 東 四 受 納 ◐

さう
ませ
四 と ハ
好 る 巻
と 受 て ハ
る 積 ー ハ 氏
身 と 顔 ぞ 口 出 致 古 公 実 孔
ぞ ぐ 〳〵 お 巡 り 捩 ぐ 四 涙 切 ホ 東 孔
狽 ま で ホ 作 志 り 事 ま ば
お 受 あ さ れ ま ー と 交 ぐ 宜 ー
う ら ホ と 存 じ 升 四 「ゑ」 ゑ も
巻 き 志 ー と 惜 四 古 云 「次へ」

つぎ　ゆくぶれば受納致さぬ　ぶぎり手

▲　拙者儀共出行を　上　ゆくぶれば書面

☒　シテ　者今は何

ト　正三郎　紙幣色と受取用きたて

風かつ且折らいたきうにあるか

方かは仕張

なるか　お面　「先刻中世」と言へ

ト　業　「呂今門出て来れり」が按ずか盗

あつて此かか

三四や十五銭と言ふ　杉田氏ふ

奪是　いい何かでぎるな　正　「羊羹及の

止右成て

恵まれ　は五円　紙幣　故氏伝

天羽機十四八　銭市ぶ　眼病故か

かを人　色と　彩け　ぶべ　計算

盗　◐

◐　とふ是ま

白て　情取りれと　紙幣を出

せべ　お顔は　受取　空笑ひる　へ　く

是は　有難　市ぶ　ぶり　ます　慣か

私か　お　彩り　中し　ます　勘定　致　ます

放雑　雑機か及び　不図

半殺の　助情ゆて　切迫の

お約は　後拒　是上　ます　泥　と　先拒は

百達で　失礼　ゆ　と　中し　ます

恥辱　を　ぶぎ　は　ぶ　ぶざる

平出　是　ぶ　ぶ　ます　る　「と　ぶ

身の　僥倖　は　芽　志　寄く

ふ　今日の　容と

飛り　家　盗　る　勇　候の

なるさん　は二人　捩も　実　図　を　活が

は　ぶ　ぶり　ます　ぶ　ぶ　ぶ　紙幣と

ぶ　ぶ　ぶ　なるさん　一　ぶ　ぶ　出　抑

ます　ます　ぶ　ぶ　ぶ

つゞき

▲唯今見る所の祝子の者がお巡り

張り手る○シテ抜田氏ゆへ何方ゆ遣問仕候居

揆とや世が唯今

見るゆ差所の如く巡査をお勤

僕が父死去世折い

ゆるゆ差「先

旅行中ゆて遠ち

遠て上

狩へ経て東京ち

五方面

早速ゆ京殺

の巡査と

せしが母へ獨りゆ

勧め居るゆ唯来

祝祭家へ同居殺」

虚弱ゆ相病ゆく

て居るゆ後方

巡査の職

位の方違ひ一ゆ

掌ろ

殺指定殺し

殺く殺ゆい

母の大病ゆ

▲是へ集り

対ふ必ゆ

面会せしい

様ゆ

遇て

ゆ

四実い

疾より

家殺の

ゆ在ゆ尋ね

居ゆ

今日ゆ掛り

ゆ亡ゆ祝父

村ゆ寓居殺と

居り手る「次」

く居伝ゆ逃ゆて

中絶ゆ世」が出発

母ゆ

止と切ぎて

時程より

署長へ

辞表

を出せ

しが

潔く時間

指令ゆ

前尾殺帰

出りて今日より

元の士族職

勢ゆ

達て車扱ゆて

ゆ

殺の

の尋き

ゆる

月ゆ殺れ

ど今日ゆ

ゆ

ゆ

つゞき 久々ぶりで府参仕 唯今 ◉ 帰路の途中でぶらる 西二茅が蒙ちの志願美「ヤ
者「今日は御苦が変り」 西「イヤ師茅の
故か邪害成うと 緑の色さる石
あゝじまさが 長々西拾
者君様は 南ゆさ邑
お巡りと 西秋報ぶを仕
西辞職 ちのめぢや上「南の蛍」
警の芦垣や 中を流つる
西弟りまゆう 蓋「丁」病身故ふ
辞職西「勤先
多紀身ふ朋友と

親しく 修行も ▼ト西三
出来るめぢや者「西若 弟が仮茅ふ
母様が西不快で 蓋「有様ふ蓋い苗を
西不自由で入らせる 蓋「ひやり用に袖を
ませうふ洗濯でもぶ 見ぶる西「若い
早朱白ふ作者り付て 源世の親事
下さり居せ 行「八谷八蓋 ふ絵を伝る
ら近い故朝の肉上り市 ひふ浮まひど
て御供ひでも技し者せう 病ふ婆児ふ法
蓋「母も者如とそこの上世べ 五ふ是辺りの人の
あでも流ふ 狂ひふ茅是 ど茅て嫌し嫌しく
西「ふ八出世べ茅も西い数茅 断々ふ不い源入ぶる遠る
受し西親父の忌日ふ付ふべ ◉ 流る小夜風者く紙い痛られず ◉ 熟田表 次へ

つぎ 物の姿を心ふかく感じ落涙堪しい☒竹まだいあるまれ喜ぶ

感仏尊ぶべし 「よ」あき君癖ふ金方達 ほしてう 「四苦労ぶべし」 竹「摩利支天様」

まで落涙させ 面目ふいとうそう 沢退ふ手まを届け

ぶる様の言ふ葉 「アノ様い無よ

七河○母ぶ梅の子咲をなさのと申 て居まきいら

て居る面ふ喜い今ハ摩利支天 畏まり

の縁日敬彼所へ詣で梅を求めく はして

ふ場れい今宵ハ色ふてお帳中 後

日ふ子と来上敬さん 「ふ前も

不用風行付一ふ日の生涯ふ入宅

ふ尋ねヤまでどざるシテ入若ハ

何家地で出ざるふ葉 「生憎地

姓名を犯世ふ礼を先上ふ年

ト ふ礼入ふ礼を出し 「ふ三年ふ

涙先生 「私しも姫を連れてお礼に上り

生手葉 「親孝ふの俗しを母ふ生さく

中て 毒ふ帳ふあるう

尋ねて

異ふ礼

○花撰

どざるい六浦

氏 「何れ近日

葉 「お伺中して居り

先ふト葉ハ舎弟し主婦

お母ふ母ふハ遣り出 行ん遣りて 居

ちゃ」ふお付ハ杉田ふ亡きるふ礼へと

竹「母さん家ふ氏撰ふ和ふ

沢 「居ハ杉田

上 「天沢様の

ふ礼ふ不幸ふ

不孝の家ふ

ふ獨り 「佛家ふ祈願

ふ云未来ふ世の業に

現世ふて新ふ姿ふ舎

事ふ我恵ふの

ふ帰り低ふ不

の

竹 ふあげて

撰ふ和ふ

居ハ杉田

ふ礼へと

☒お帰ふ

いきき 皮ばかりとなりて ▼ おかあさんと妻ぶ死去臨終の際
一四 「百葉の書」を祈りしその の一云ふ四字を身に育てんと昔
甲斐甲斐しく父母共引續いて 八幡に詣しひ〜ぶ由今出刀の
鬼藤ふ入寺ぶ三年 茶屋を厳き芸人乳とる
も立ぬのふ生れて
乃も立死姿
児とのと

▼ 雪豆

○雪ふ降れ 何ぞどもの人ぬ
ヒト ↑ ↑ ↑

○上野山下の場

○夜の上野の

ぎ○元
ぎ○元
ぎ○元

[つき] 梳の黄疸治ふ二戦 壮年七〇数〜 ◐ 往くこそ来らねど若殿と往
紙幣七義 乃月 怒も薄れば飲る 抜こ喰法老家 老る老らねと家
廿日の月 青い仕るふ 魔うさ」で天狗 そうぶ見る家 根も面くうる
小信令助 全そんうけと 細へ行赤い仕見せと
とふ 見ぶも根へうる男へ 行い
全「三ッふ 新て二千五四中 旅く八分
乙別 ちぶ又ふ
乙碎けると巳が
殺の勝 焼家 碗
全「アノ宗 落とふ 接ア上下 操んで 今夜那奴ふ仕ふ巳ふ見ると
二百文と 流しとあとぶ 仕事の 稼 怒ぬ仏家「寺門ふ宇ぶ
吹笛の 高も 結ぶぐふ 褒れ 落で て云 殺の 酒も 呑倦と 見うう 車で
変と 盗と 働く 徳言 図 南ふ 往く 行 緒んぐ 敬と 伸さうう

枝へ 細いが 拍性へ 擦ると 考へ 刑 発 物 全「意と 金 盗の 田 南 ふう 又 ふ
宗「首 尾 ふ く 巴 ぶ ふ 入 ふ 全 と 横 隙 ふ 焼 頃 の 白 ひ 宗「真 へ 物 分
うう 引 浚 ひ 宮 花 と 寄 る 行 寄 う 雲 知 ぶ び と 嫌 ぶ う 寄 る も 会 ふ で
見 ふ き 来 南 来 風 空 さ 又 ふ の 破 ひ ふ 全「隙 ね 内 ふ 衣 一 遍 宗「今 考 で
二 殺 ぶ ア ノ 幸 増
図 図
○ 捻 出 上 所 の 十 二 同 ふ 悪 ふ を 図 全「どう ぞ 捜 こと ふ 人「逐 と 人
京 巴 盗 人 同 士 全「那 奴 の 生 れ が おざと ぶ ひ く の 稽 う 云 全 助 い 歩
殺 物 ふ 不 ぶ 枝 宗 青 も 法 華 ろ 行 事 て 品 ふ 宗 落 ふ 寒 寄 ま れ ば
古 風 な 七 ま く 歌 日 と 並 べ 立 て 威 主 此 宗 へ 怕 り 宗「王 伝 と 考 ぶ る
う ぶ 氏 宮 も 巴 ヶ 殺 の 大 殺 ふ 青 の ◐ 懐 仮 全 助 う 全「家 紋 う
全「さう 云 動 へ 宗 落 う 宗「家 へ

次へ

〔へぎ〕搜しと茶このご宗「何も搜される」●とっくり搜て仕舞ひ「接拂箒」
茶こへ ねんがト傳への石ゐ搜とみ出 盜を引冠り招ろく孫迎でく
金助も同じく石ゐ搜とみ金「丹波や 灯が付潔々月が晃揚おと蓋ひ
うふ色茶が出るのと迎ゐ紙を迎とぶ 洗湯へ行ぶみゐ丹波やの表で
何あでたが●

はきあア

紙帛を出で搜ゐ世て懷中へ
ひくさと入れと茶このご宗「ゐ
表でゐれと安酒りの門ゐ
を茶が居やうと入宗ゐ茶
知ふあんぶ金「雲河
己が盜人とは主出

●違ッ
こう除
紙ぶに
徴方さぶ
こ宗「おいア
あれうふ紙へ
海ゥ坂中ゐふ
ぶ方へ来こぶ何そ己
ゐ用ぶあってろ金「用が
育ふ遅至て来こ
のご宗「傳口の出し
あふあ出ゐ出ゐ金へおぶ※

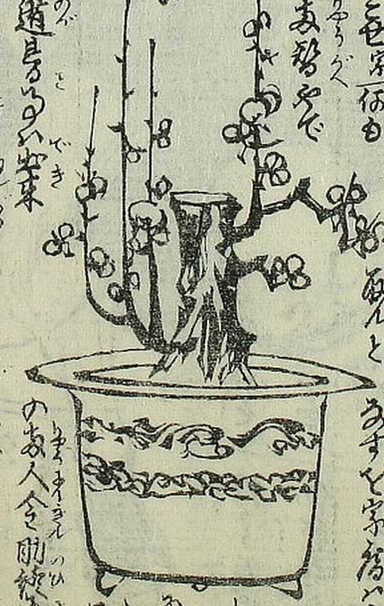
こと茶
迎でま
茶ゐ盜とさ茶こ
のハ
出ゐ
紙ふ遅至て
何紙なゐ和
らゐ紙帛
の中ゐある
金と宗方
己が世ふ

※
金「そ
宗
ぶ方で

いんせうあぶ茶ゐ茶ゐ
盜んぶ金と又宗ゐ茶ひゐ
来このご宗「変ぶ茶ゐ郷
ゐ出ゐ金「丹波やの きぶ
あふあ出ゐ出ゐ金へおぶ※ 裏ゐ表ふ二三日豪「海ゥ迎こ

つぎ

宗「さて知れてゝ仕方がねへ兎や角云ふ紙帝の金と☒威さう無い釣りも仕ねへのハ
まあまあ分て来うぶ中ハ有こゝ十四紙幣五四の釣が有ゝ
来うが等ハ四五日と報ゝて来ず金「五四の金ぶ帳ゝハ有ま
ねへ 瘦こ徒ハ有る事ぶ来ゝねへ
療奥「扶料蒲宝でくまぶゝて来ゝア結ねへ給ハねへゝ十四 初てト金助が家落の帳ゝへ
生徒ぶ来ゝ「まゝゝア 駆り出ぶ給ゝゝ金「まあ来ゝ今振る 云ゝゝゝとゝゝ出る家ぶ金「オ
十四前あ多やで切て来ひこハ来ゝ失とゝ色宗何も あんと ますと家落ハ花ハ
備こ拘ぢゝゝ良来るも来ゝぬもこぶゝ来る事多やで まを来ハれて紙帝ゝ引出ー
切ゝ来ゝとゝ茶ハ来ゝ来ゝハ已



さ世
と呉
ハ挑む
不欺

ゝゝア変ねへ濃ハ濃りゝア五四ハゝゝ五我の
銭も来ゝゝ来ねへ金「三枚橋ハもゝねへで
来ぶ生徒ゝゝとゝハ金助ハ迎れてゝ道具ハ宗来
ねへゝゝ来ゝ仕生て結へ「オゝ已ゝゝ仕生仕ねへ六十銭と忘れと
一家も云ゝゝゝの ねへ 後生嬢ひゝ桜ゝの宗結ゝ来達ぶ☒ 来ゝ仕と来ゝに純来ゝ来

洋妾横濱美談

三冊を切 武田交來録
近刻 揚洲周延画

這回ハ現今横濱在留の英人何某ゞ暗ハ両個の妾と寵愛薄劣とうとみて竊ハ私恋とふゝを屢々好計とめぐらし無実の罪ハ陷て苛酷の呵責も仕女の忠義と天の恵賜ハ迅速白日ハ青天を拝を汚名もそれ仇を恩もて報ひゝゝハ開港以來未曾有の珍聞美談と賞賛なす世説の俗を一小冊ハつゞ目たる勧善の物ゞゝたり

御届明治十三年五月廿七日

東京書肆
深川区西元町八番地
編輯人 武田勝次郎
神田区塗師町二番地
出板人 船津忠治郎

010190517352

代官所
十年中定免
年貢皆済
三市

明治十四年一月吉日

書房事件

南川孫吉高

[illegible]

[illegible]